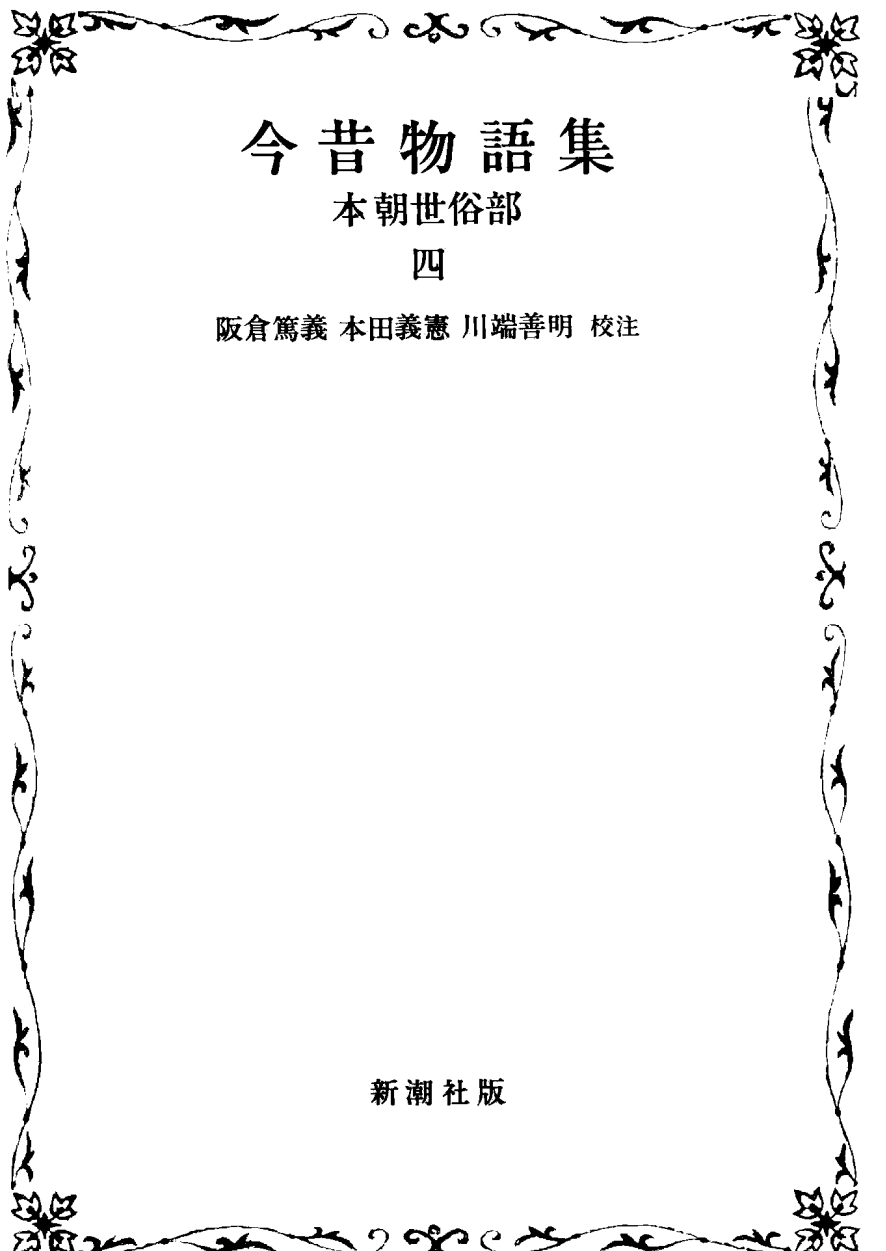


A decorative border with floral motifs at the corners and scrolling vines with leaves along the sides, enclosing the text.

今昔物語集

本朝世俗部

四

阪倉篤義 本田義憲 川端善明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第六四回）
 今昔物語集 こんじやくものがたりしゅう
 本朝世俗部四 ほんちようせぞくぶ

定価二二〇〇円

昭和五十九年五月二十五日 印刷
 昭和五十九年五月三十日 発行

校 注 者

阪倉篤義 さかくらあつぎ
 本田義憲 ほんたぎん
 川端善明 かわばたよしあき
 佐藤亮一 さとうりやういち

発 行 者

印 刷 所

大日本印刷株式会社

発 行 所

株式 新 潮 社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
 電話 東京03(二六六)五一(業務)
 東京03(二六六)五四(編集)
 振替 東京 四一八〇八

装画 佐 多 芳 郎
 組版 シーティエス大日本
 製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Atsuyoshi Sakakura, Giken Honda, Yoshiaki Kawabata, Printed in Japan, 1984.

ISBN4-10-620364-2 C0393

目次

凡例 九

卷第二十九 本朝付惠行 一七

卷第三十 本朝付雜事 一六

卷第三十一 本朝付雜事 三七

付録

説話的世界のひろがり 三四三

年表「盗・闘」 三八三

地 図 四〇六

「説話的世界のひろがり」見出し索引 四一〇

頭注索引 四二三

卷第二十九 本朝付愚行

西の市の蔵に入る盗人の語、第一	一九
多衰丸・調伏丸、二人の盗人の語、第二	二
人に知られざる女盗人の語、第三	三
世に隠れたる人の聳と成る□語、第四	三
平貞盛朝臣、法師の家にして盗人を射取る語、第五	三
放免共、強盜為むとして人の家に入りて捕へらるる語、第六	四
藤大夫□の家に入りし強盜の捕へらるる語、第七	四
下野守為元の家に入りし強盜、女を取る語、第八*	五
阿弥陀聖人、人を殺して其の家に宿り、殺さるる語、第九	五
伯耆の国府の蔵に入りし盗人の殺さるる語、第十	六
幼児、瓜を盗みて父の不孝を蒙る語、第十一	六
筑後前司源忠理の家に入る盗人の語、第十二	七
民部大夫則助の家に来たる盗人、殺害人を告ぐる語、第十三	七
九条堀河に住む女、夫を殺して哭く語、第十四	七
検非違使、糸を盗みて見顕はさるる語、第十五	七

或る所の女房、盗を以て業と為し、見顯はさるる語、第十六（本文欠）		七
摂津国の小屋寺に來たりて鐘を盗む語、第十七		七
羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の語、第十八		八
袴垂、関山にして虚死して人を殺す語、第十九		八
明法博士善澄、強盗に殺さるる語、第二十		九
紀伊国の晴澄、盗人に値ふ語、第二十一		九
鳥部寺に詣でし女、盗人に値ふ語、第二十二		九
妻を具して丹波国に行きし男、大江山にして縛らるる語、第二十三		九
近江国の主の女を美濃国に將て行きて売る男の語、第二十四		九
丹波守平貞盛、児干を取る語、第二十五		一〇
日向守□、書生を殺す語、第二十六		一〇
主殿頭源章家、罪を造る語、第二十七		一一
清水の南の辺に住む乞食、女を以て人を謀り入れて殺す語、第二十八		一六
女、乞丐に捕へられて子を棄てて逃ぐる語、第二十九		一三
上総守維時の郎等、双六を打ちて突き殺さるる語、第三十		一六
鎮西の人、新羅に渡りて虎に値ふ語、第三十一		一八
陸奥国の狗山の狗、大蛇を咋ひ殺す語、第三十二		一三
肥後国の鷲、蛇を咋ひ殺す語、第三十三		一五
民部卿忠文の鷹、本の主を知れる語、第三十四		一八

鎮西の猿、驚を打ち殺して報恩の為に女に与ふる語、第三十五	一四〇
鈴鹿山にして蜂、盗人を螫し殺す語、第三十六	一四六
蜂、蜘蛛の怨を報ぜむとする語、第三十七	一五〇
母牛、狼を突き殺す語、第三十八	一五三
蛇、女陰を見て欲を発し、穴を出でて刀に当りて死ぬる語、第三十九	一五五
蛇、僧の昼寝せる間を見て、姪を呑み受けて死ぬる語、第四十	一五八

卷第三十 本朝付雜事

平定文、本院の侍従に仮借する語、第一	一六三
平定文に会ひたる女、出家する語、第二	一七〇
近江守の娘、淨藏大徳と通ずる語、第三	一七五
中務大輔の娘、近江郡司の婢と成る語、第四	一八〇
身貧しき男の去りし妻、摂津守の妻と成る語、第五	一八七
大和国の人、人の娘を得る語、第六	一九三
右近少将、鎮西に行く語、第七	一九九
大納言の娘、内舎人に取らるる語、第八	二〇五
信濃国の姨母棄山の語、第九	二一〇
下野国に住みて妻を去り、後に返り棲む語、第十	二二三

品賤しからぬ人、妻を去りて後に返り棲む語、第十一	二五
丹波国に住む者の妻、和歌を読む語、第十二	二九
夫死にたる女人、後に他の夫に嫁がざる語、第十三	三二
人の妻、化して弓と成り、後に鳥と成りて飛び失する語、第十四	三四

卷第三十一 本朝付雑事

東山科の藤尾寺の尼、八幡の新宮を遷し奉る語、第一	三九
鳥羽郷の聖人等、大橋を造りて供養する語、第二	三三
湛慶阿闍梨、還俗して高向公輔と為る語、第三	三四
絵師巨勢広高、出家して還俗する語、第四	三八
大藏史生宗岡高助、娘を傳く語、第五	四〇
賀茂祭の日、一条大路に札を立てて見物する翁の語、第六	四六
右少弁師家朝臣、女に値ひて死ぬる語、第七	四九
藤原隆経朝臣、燈火に影を移して死にたる女に値ふ語、第八*	五三
常澄安永、不破関にして夢に京に在る妻を見る語、第九	五七
尾張国の勾経方、他所に宿りて夢に妻の來たるを見る語、第十*	六〇
陸奥国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返る語、第十一	六三
鎮西の人、度羅島に至りて虎に値ふ語、第十二*	六七

大峰を通る僧、酒泉郷に至る語、第十三*	二七〇
四国の辺地を通る僧、知らざる所に至りて馬に打ち成さるる語、第十四*	二七六
北山の狗、人を以て妻と為し、人來たりて其の所に至る語、第十五*	二八三
佐渡国の人、風の為に知らざる島に吹き寄せらるる語、第十六	二八八
常陸国□郡に寄りたる大きな死人の語、第十七	二九一
越後国に打ち寄せられたる小船の語、第十八	二九三
愛宕寺に鐘を鑄る語、第十九	二九五
靈巖寺の別当、巖廉を砕く語、第二十	二九六
能登国の鬼の寝屋の島の語、第二十一	二九八
讃岐国の満農池類したる国司の語、第二十二	三〇〇
多武峰、比叡山の末寺と成る語、第二十三	三〇三
祇園、比叡山の末寺と成る語、第二十四	三〇六
豊前大君、世の中の作法を知る語、第二十五	三一
打臥御子の巫の語、第二十六	三二三
兄弟二人、萱草と紫苑とを殖うる語、第二十七	三三五
藤原惟規、父為善と共に越中国へ行きて死ぬる語、第二十八*	三七七
藏人式部丞貞高、殿上にして頓かに死ぬる語、第二十九*	三〇〇
尾張守□、鳥部野にして女を出だして知らざる語、第三十*	三三三
帶刀等、北野の小鷹狩にして、魚を売る女に値ふ語、第三十一*	三五五

人、大路にして、酒に酔ひたる販婦の所行を見る語、第三十二*	三七
竹取の翁、篁の中にして女兒を見付けて養ひ立つる語、第三十三*	三九
大和国の箸墓の本縁の語、第三十四	三五
元明天皇の陵を点ぜし定恵和尚の語、第三十五	三五
近江国の鯉、大海の鰐と戦ふ語、第三十六*	三七
近江国栗太郡に大柞を伐る語、第三十七	三八

(* 印の語は、各語の標題と小異あるもの)

凡 例

〔本文〕

一、本文は丹鶴^{たんかく}叢書本を底本とするが、底本を、その表記法まで忠実に再現することは避け、つとめて読みやすい形をとるようにした。丹鶴本の誤りや疑問点は他本によって校訂して、本文を整えたが、そのことは頭注に必ず記されている。

一、底本は、漢字・片仮名交りで、片仮名を二行に小書きする、いわゆる宣命^{せんめい}体で書かれているが、本書には次のように統一した。

A 底本の片仮名はすべて平仮名に改め、仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した（振り仮名も、原則として同じ）。仮名は小書きせず、漢字と同ポイント活字にした。

B 本文は意味をとって適宜に改行し、また段落を設け、会話文および、必要によっては心中思惟の部分に「」を付け、句読点を施した。清濁も、校注者の解釈によって書きわけた。

C 底本の欠字は□によって示したが、該当すべき語の推定できるものについては、傍注もしくは頭注にそれを記した。

D 漢字の字体については次の方針に従った。

a 異体字は、その異体字体に何らかの意味がある場合以外、原則として通用字体に統一する。

(例) 猗 ↓ 狗 弊 ↓ 弊

b 分字あるいは合字は底本のままとし、頭注に解説する。

(例) 草馬 (「驃」の分字) 突部 (「穴太部」の合字)

c 用字の全巻にわたる統一は行わず、底本のその個所の用字を尊重する。

(例) 牴 ↓ 牴 牛

E 底本の漢字はなるべく保存するようにしたが、次のような場合は平仮名に改めた。

a 返読の助動詞やそれに相当する表記。

(例) 被用 ↓ 用ゐられて 不狂 ↓ 狂ひそ

b 接統助詞やそれに準ずるものの表記。

(例) 雖有 ↓ 有りといへども 乍 ↓ ながら

F 漢字を返読する場合の語序は、原則として改めた。

(例) 无限 ↓ 限無し 難有 ↓ 有り難し

G 送り仮名については次の方針に従った。

a 活用語の場合、誤読を避けるために活用語尾はなるべく示すようにする。

(例) 有 ↓ 有りけり

b 複合語も右に準じる。ただし、接頭語や、二字以上による熟合的な語については、仮名を介入させず、そのために読みにくくなる場合は、振り仮名を付す。

(例) 立走^テ↓立ち走りて 打言^ッ↓打言^{うち}ふ 御座^ス↓御座^{おは}す

c 副詞類については、原則として語幹の最後の音節を一律に平仮名で補記する。

(例) 慥^ニ↓慥^{たし}かに 自然^ニ↓自然^{おのづか}ら 強^ニ↓強^{あなが}ちに

d 名詞に対する送り仮名は、底本にはあっても、原則として付けない。それを省いたことによつて誤解の恐れが生じる時は、改めて振り仮名を付す。

(例) 驗^シ有^リ↓驗^し有^り

H 振り仮名については次の方針に従った。

a 宛字には必ず付す。

(例) 衣曝^{きさくろ} 艶^{えい}ず 可咲^ましき 微妙^{めいぶ}く

宛字が表音的である場合(たとえば「浅猿」)は、まず振り仮名を付けることを優先し(この場合は、必ずしも歴史的仮名づかいに従わない)、その上でさらに送り仮名をも考慮する。したがって、次の例のように送り仮名に不統一が生じる場合も、ままする。

(例) 浅猿^{あさま}さ↓奇異^{あさま}しく

b 補助動詞・副詞などの文法的な意味を担うもの、あるいは読み方の違いが語義の違いを導きそうなものには、原則として付ける。

(例) 強^{あなが}ちに 下様^{しもさま}に 思^{おも}へて

c その他、読みにくいものには、見開き二頁の範囲内で少なくとも初出のものには付ける。

(例) 繚^{あつか}ひて 但^{うつつ}して 販婦^{ひんぷ}

d 固有名詞（人名・地名など）の一般的でないものについては、一話の初出の際には少なくとも付ける。人名における姓と名をつなぐ助詞「ノ」字は、送り仮名とせず、振り仮名の中に入れる。

（例） 茨田^{くさ}重方^{しげな} ↓ 茨田重方

〔注 釈〕

一、注釈は、傍注（色刷り）と頭注とよりなるが、原則として、傍注には現代語訳、頭注には、事柄や言語に対する解説を宛てるようにした。しかし、スペースの関係で、現代語訳を頭注欄にまわさざるを得ない場合も生じた。

一、傍注の現代語訳は逐語訳ではなく、スペースの許すかぎりにおいて自然な現代語であるように努めた。

一、傍注における「」は、本文にない語（主語・目的語・述語など）を補足するものであり、（）は、会話文の話者を指示したり、欠字の個所に語句を想定補足したりするものである。

一、頭注は、説話の理解を深めるのに役立つように努めた。

一、頭注には次のような略記法を用いる。

A たとえば「元明」和銅元年」は、「元明天皇の和銅元年」を意味する。

B 『名義抄』『字類抄』『大系』『全集』は、それぞれ、『類聚名義抄』『色葉字類抄』『日本古典文学大系（今昔物語集）』『日本古典文学全集（今昔物語集）』を意味する。

C たとえば「二三―四」は、『今昔物語集』第二十三卷の第四話を意味する。

一、頭注欄の適当な個所に*印の欄を設けた。巻末の付録「説話的世界のひろがり」に、頭注欄に述べきれない、説話的な世界の事柄を解説したが、*印は、それへのインデキスである。随時参照ねがいたい。

二、頭注欄には、各話の主要な段落に小見出し（色刷り）を入れ、話の展開をわかりやすくした。

〔付録〕

一、付録として「説話的世界のひろがり」、年表「盗・闘」、地図三葉（「京師内外図」「比叡山三塔・湖西と湖南・宇治・山科」「明日香・多武峰」）および「説話的世界のひろがり」見出し索引、「頭注索引」を付した。

一、「説話的世界のひろがり」は、頭注からはみ出す、主として説話的世界の事柄を記すことにした（頭注欄に*印および「」をもって記した見出しが、それぞれに対応している）。これは、言わば注釈のなかであけた幾つかの窓である。その窓からわれわれは若干の風景を見る。

一、「頭注索引」は、本巻を含め四巻分、即ち本朝世俗部全体についての、頭注のみに関する索引である。

もと、われわれは、本朝世俗部の展開する説話世界について、「説話索引」の作製を志した。それは「節用集」の形式をかりて分類を行う予定であった。しかし、要する時間と紙幅の関係から、それは中止せざるを得なかった。この「頭注索引」は、一たび志した「説話索引」の、作業的な一

過渡に属するはずだったものである。

本文の作成には内田賢徳氏の協力を得た。